

図 3.3.3(a) コンクリート部の平均変位

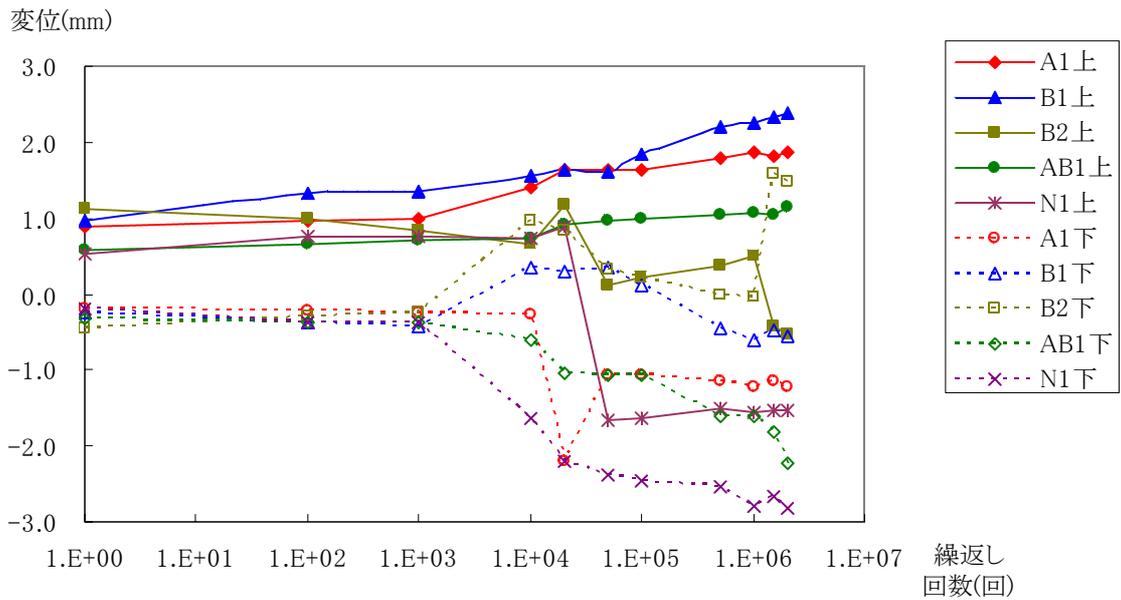


図 3.3.3(b) コンクリート部の平均変位(上側、下側)

A1、B1、AB1 については、载荷回数が増えるに伴い、上側、下側とも変位の絶対値が増加する傾向が現れた。B2 については、10,000 回で下 c 面 (D5) が、50,000 回で上 c 面 (D3) がドリフト(時間経過に伴う変位計の著しい値の変化)し、1,500,000 回で下 c 面 (D5) が再度ドリフトしている。また N1 については、50,000 回で上 c 面 (D3) がドリフトしている。これらドリフトにより、測定値に乱れが生じているが、これらを除けば、変位の絶対値は増加している。特に 10,000 ~ 50,000 回程度に急激に変位が増加しており、この時点で供

試体の挙動が変化した可能性がある。

各切り欠きにおけるひびわれ発生時とすべての面のひびわれ貫通時の載荷回数を表 3.3.3 に示す。

表 3.3.3 各切り欠きにおけるひびわれ発生時、貫通時の載荷回数

		A1	B1	B2	AB1	N1
ひびわれ発生	切欠 1	1	1	1	1	1
	切欠 2	1	1	1	1	1
	切欠 3	1	1	1	1	1
ひびわれ貫通	切欠 1	1,000	100	10,000	1,000	100
	切欠 2	1	100	20,000	20,000	1
	切欠 3	500,000	100	20,000	20,000	100

また、鉄筋の抜け出し量を式(2.2.1)により求めた。結果を図 3.3.4 に示す。

ドリフトが生じていない A1、B1 については、載荷回数にしたがって、鉄筋の抜け出し量が増加している。B2 はドリフトが生じた 10,000 回、50,000 回、1,500,000 回を除けば鉄筋の抜け出し量は漸増傾向にある。AB1 は上(D1)が 20,000 回でドリフトしているが、全体として漸増傾向にある。N1 もドリフトが生じた 50,000 回を除けば鉄筋の抜け出し量は漸増傾向にある。以上からすべての供試体において、鉄筋の抜け出し量は漸増傾向であると言える。ドリフトの影響があるため明確に現れていないが、10,000 ～ 50,000 回程度で鉄筋の抜け出し量の増加があり、解体した供試体に塗料が付着していることと合わせて、塗膜とコンクリートとの間でこすれが生じていると考えられる。

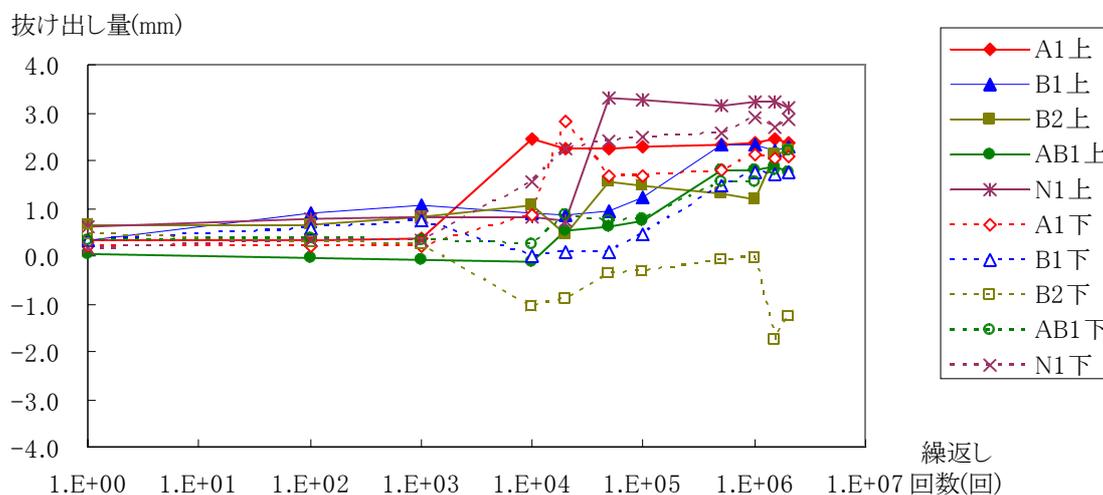


図 3.3.4(a) 鉄筋の抜け出し量 (D_u, D_t)